

# レベッカ「フレンズ」―「位相萌え」の世界と若者

愛知学院大学文学部宗教文化学科准教授

くまた かずお  
熊田 一雄



以下に、日本の1980年代を代表するロック・バンドのひとつであるREBECCAの名曲「フレンズ」(1985年)の歌詞を部分的に紹介する。ドラマの主題歌などによくカバーされているので、日本の若者で耳にしたことがないという人は珍しいだろう。現代日本の若者にとっては、この曲はもはやJ-POPの古典的な名曲となっているように思われる。

「口づけをかかわした日は／ママの顔さえも見れなかった／ポケットのコインあつめて／ひとつづつ夢をかぞえたね／ほらあれは2人のかくれが／ひみつのメモリー oh……ねえ君は覚えている／夕映えによくあうあの曲／だまりこむ君がいつも／悲しくて口ずさんだのに／今時は流れてセピアに染まるメロディー oh」と歌う歌手NOKKO(女性)と、この曲で「君」と呼ばれている「フレンド」が異性か同性かは明示されていないが、私は同性(女性)だと思う。「フレンド」が異性(男性)なら、曲名は「ラヴァーズ」となるのではないだろうか。

「君」が女性であるにせよ男性であるにせよ、この曲の魅力は「私」や「君」という「キャラクター」にあるのではなく、「私」と「君」とのつながりのあり方、権力関係

(支配=従属関係)、つまり上下関係、ましてや主従関係ではないつながりのあり方、関係の対等性にあるのだろう。自称乙女派文筆家の嶽本野ばらの表現を借りれば、聴き手はこの曲に「キャラ萌え」しているのではなく、「私」と「君」との関係の対等性に「位相萌え」しているのである。つまり、この曲が最初に大ヒットした1985年頃には、日本の若者たちはカップル関係において対等な関係性を求め始めていたのではないだろうか。

その後、日本社会では男女共同参画社会基本法(1999年)が成立し、多様な個の尊重と対等なパートナーシップに基づく社会の実現への流れができた。「フレンズ」はリリースから四半世紀を経て、消えていくどころか、逆に現代日本の若者文化において古典的名曲としての地位を確立している。

このことは、現代日本の若者たちが、男女共同参画社会へと向かっていく時代の大きな流れの中で、少なくとも心の奥底では、カップル関係においても、もはや権力関係(支配=従属関係)ではないつながりのあり方、対等な関係性を求めるという風潮が定着したことを物語っているのではないだろうか。

(著作権協会歌詞使用許可番号1104849-101)



北九州市立男女共同参画センター **ムーブ**  
〒803-0814 北九州市小倉北区大手町11-4  
Tel:093-583-3939 Fax:093-583-5107  
ホームページ <http://www.kitakyu-move.jp>  
E-Mail [move@move-kitakyu.jp](mailto:move@move-kitakyu.jp)

## Cutting-Edge 第42号

【発行】北九州市立男女共同参画センター・ムーブ  
【発行日】2011年6月10日  
指定管理者は(財)アジア女性交流・研究フォーラム



# Cutting-Edge

[カティングエッジ]

MOVE **人** にきく

## 東日本大震災と災害復興

### ―ジェンダーの視点から日常のまちづくりを



山地 久美子  
やまじ くみこ

関西学院大学  
災害復興制度研究所研究員

3月11日に発生した東日本大震災は、M9の地震、大津波による被害とそれに続く原子力災害への対応に未だ先が見えず、この甚大な災害は終戦に続く日本の転換点と言われている。東北・関東地域の復興は長期にわたって日本社会全体で取り組むことが必要で、それはジェンダーの視点からも言えることだ。

阪神・淡路大震災の復興過程では、「働く夫／家庭を守る妻」の性別役割分業の固定化やパートタイマーの大量解雇が社会問題化した。また、復興まちづくりの現場で女性は活躍したが、復興委員会などの公的な場は多くが男性に占められ、とりまとめられたことの成果についてはまだ検証がされていない部分もある。

東日本大震災ではどうなのか。

阪神・淡路や中越地震などの経験から、避難所運営への女性の参画や間仕切りなどによるプライベート空間の確保の必要性が指摘されていて、今回筆者も提案をしたところである。だが今も多くの避難所は男性が主に運営し、間仕切りが設けられていない所もあり、その対応は必ずしも十分とは言えない。阪神・淡路を経験した石巻市や松島市の避難所支援者(高砂春美氏)が述べるよう、「コミュニティが形成されているから、間仕切りは必要ない」場合もあるだろう。だが、女性の意見が十分に反映されていることが十分条件だろう。

仙台市では「せんとくネット」という女性被災者に限定した支援が、特定非営利活動法人イコールネット仙台(代表理事:宗

片恵美子氏)らによって展開されている。避難所の女性の洗濯物を預かり洗濯して渡すのだが、それによってコミュニケーションをはかり、そこでのニーズや女性の声を聞くことができる。この活動には250名以上の女性ボランティアの応募があったそうだ。このような女性による女性への支援活動がすぐに展開できるのは、支援者が被災前から地域に根付いた活動を行っていたことが背景にある。復興まちづくりの現場には、災害が起こる前の日常のまちづくりが反映されるためだ。

災害後間もなく設置された岩手県東日本大震災津波復興委員会では当初、委員16名が男性のみで構成されていた。その後各所から指摘を受けて、第2回委員会において2名の女性委員が追加任命された。復興まちづくりの基礎となる復興委員会に県民の半数を占める女性をなぜ当初から一定数参画させなかったのか。16年前の阪神・淡路の時と状況があまり変わっていないことに改めて気づかされるとともに、日常の社会通念、慣習の反映なのではないかと思わざるを得ない。

それだけに、私たちは今、被災地への支援とともに、自分のまちや地域社会をジェンダーの視点から見直していくことが求められる。阪神・淡路大震災前に形成された神戸のまちづくり協議会のシステムが復興まちづくりの基本の1つとなったように、ジェンダーの視点から問い直された日常の意識の変化や仕組みが、災害時の対応に自然と反映され、男女が協働できる新たな社会を築く礎になると確信している。

## CONTENTS

- MOVE この人にきく ..... 山地 久美子 ― p.1
- Books ジェンダー最・前・線
  - 『真奈美、高1★16歳』(大塚恵美子 原案) ..... 新谷 遥香 ― p.2
  - 『癒しとイヤラシ』(田中雅一 著) ..... 木下 直子
  - 『女、一生の働き方』(樋口恵子 著) ..... 富永 桂子 ― p.3
  - 『わたしのとくべつな場所』(パトリシア・マキサク 作) ... 草谷 桂子
- ジェンダーエッセイ ..... p.4
  - レベッカ「フレンズ」―「位相萌え」の世界と若者 ..... 熊田 一雄